中世佐伯荘

宮下良明
（会員・佐伯市古江）

蓄積された中世の歴史が有り、それが近世に受継がれ蓄積の結果のわずかの一部分のみの書かれた文献類が、それぞれの歴史として我々が学んできた、所謂文書に依る歴史であろう。其の文書も総て価値のある信用されるものではない。歴史書や記録等に現れない庶民の生活と信仰、伝承、年中行事、祭祀儀礼等、中世佐伯荘民衆の実態は今尚明らかでない。

中世庶民のほとんどは、文字には縁がうすく、自から書き残すことが出来ず、一生を終えた。書き残された文書類は、一部、権力者側から見た、何らかの必要に応じてつくられたもので、書く側の意図が多分に含まれ、民衆の生活とは極めて掛け離れたものである。庶民の生活の実態は殆んど解明の域をでない。灰色の彼方である。皆無に等しい文書のない中世佐伯領の姿は、石造物、神社、寺仏、信仰等、先祖の残したあらゆる遺産を研究、其の結果によって民衆の生きた歴史が見えてくるであろう。

近世の庚申、道祖神信仰を見ても、厳しい圧政下にあって民衆の最も恐れていたのは、天災や地変、疫病の流行、飢饉の到来等である。それ等の災難を鎮める為には、加持祈祷、呪（マジナイ）、信仰の力しか無く、それが庚申や道祖神、もろ〳〵の信仰と成り、其の中で様々な行事が営まれた。其の信仰心の結果が、庚申塔や道祖神等の石造物として形に現われた。佐伯地方には、それ等の石造物が各所に多く分布し今日に至っている。

これ等の信仰は、修験（山伏）の先達で、中央から傳播され広まったもので、次第に祈禱師、呪術師、巫子等が関係する様に成った。中世を研究する上の一例である。

熊野信仰　紀州熊野三山に対する信仰をいう。其の祭神は本地垂迹説によって、本宮が阿弥陀如来、新宮、薬師如来、那智宮、千手観音菩薩、浄土教の発展によって生き乍ら浄土の世界へ導びく、其の思想と現世利益の信仰が結び付き、各地に特有の王子権現が祭られ、熊野社を分祀させた。

熊野修験　修験（山伏）が熊野権現の勧請に重要な役割を果した事は、熊野権現社の分布と、行人塚（六地蔵、

五輪塔、宝筐印塔、塔婆）等の分布が付合する事でもわかる。

熊野修験は、全国各地を遊行し地方の社寺を客僧として住み込み地域の僧侶、神官、武士、さらには俗人を熊野に導いた。先達は当初社寺に寄寓（キグウ）した紀州熊野修験であったが、やがて各地の修験が勤めるようになった。

こうした熊野詣での盛行もあって、全国各地に熊野権現が勧請されたという。古来、夷狄（イテキ）降伏の為に祭られた熊野や各地の十二所権現彦山三所権現、六所権現等は、熊野修験の影響が強く認められるという。佐伯十二社や彦宮三所神社等、それに習ったものと思われる。修験道的な色合が強い。

佐伯地方の熊野権現　近郷の市町村史に記載されている熊野社は、数十社をかぞえる。傍系の白山、王子、山王の各権現社を合わせるとかなりの数になる、社歴も中世造立のものが大半を占めている。此の様に佐伯近郷に熊野社が多く祭祀された。その中で権現特有の神楽杖踊り、湯立て、獅子舞等の神事が、修験者によって、各浦各在に傳播されるのである。

中世から脈々として、信仰の流れがあり、其の流れの中で、生まれ育った行事や諸々（モロモロ）の呪術的作法儀礼、それらは佐伯近郷に限らず、日本全国の民衆の様相で、それ等の信仰社会を造り上げ、その渦（ウズ）を各地に伝播、伝道した修験や、信仰者の占めた役割は大きく、曲折し乍らも近代に至るまで、多くの民衆に信仰芸能等を残しえた修験の行跡を見逃すことはできない。

佐伯領の社寺について少し角度を変えて見ると

五所明神社　佐伯市史、寺社記によると、其の祭神、加茂大明神、本地仏薬師如来、住吉大明神、本地仏、観世音菩薩、稲荷大明神、本地仏、毘沙門天、梅宮大明神、本地仏不動明王、春日大明神、本地仏阿弥陀如来とある。この本地仏は前記の紀州熊野三山と同一様式で観世音菩薩の脇侍が不動明王と毘沙門天であるから合わせて五所となる。この組合せは、臼杵石仏、三重町の菅尾磨崖仏に見える。

本地仏を思えば五所明神も古くは、紀州熊野三山と信仰上の結び付きを持っていたものと推測できる。

五所明神の梛（ナギ）の木　豊日史学、第五十二号記載日本大社の御神木は次の通りである。

宇佐神宮（イチヒ、樟）大神神社（杉）大山祇神社（樟）

諏訪神社（梶、アララギ）伊勢神宮（真坂樹）鹿島神宮（巌の鉾杉）香推宮（綾杉）筥崎宮（筥松）熊野神社（梛の木）等、御神木は古代より神仏が宿り、神同様とされる。五所明神の梛の木は古く樹齢は中世に登る。熊野の神木が梛の木、それは史学の示す通り。五所明神の梛の木も決して、偶然に植えたものではない。熊野信仰の関係者によって植えられた。結果的にそういう見方になる。

梛の木は佐伯地方では自生する植物ではない。大分県天然記念物に指定されているのでもわかる。

富尾神社の梛　黒沢の富尾神社は佐伯惟治を祭った神社。境内に梛の木の神木があり。やはり熊野三山の様相を示す。拝殿に大権現の扁額は明治以前権現信仰が盛んであった、それを意味する。惟治は肥後菊地義宗（大友義鑑の弟）日向南軍勢力と通じた罪によって、義鑑に亡ぼされた。そして数年後菊地氏も大友氏に亡ぼされる。大友興廃記や、栂牟礼実録を、百まで信用するわけにいかないが、その裏や側面からの見方も、中世を知る上で大切であろう。

惟治は呪術や祈禱を特異であったという。その事は修験山伏の行いと何等変わりがない。栂牟礼が落城し、一行が落ちて行く先が、日向方面を目指している様子であるが、日向南部は、菊地一族の地盤で、米良氏、相良氏、高千穂氏等、熊野信仰の大檀那人先達の居住する修験道の世界、佐伯氏と関係も深く、最も安全な地域なのである。何処でも行けば良いというものではない。それは今も昔も変わらない。熊野神社の神木梛の木、庚申塔等の石造物、現存する遺物を総合推察して行くと、惟治自身も熊野三山を信仰する修験者ではなかったか、その様に解釈すれば納得がいく。

洞明寺の梛の木　燈明寺　在佐伯荘切畠村。大同二年所創。大永中。佐伯惟治命掌禱禳事。慶長以降。改台教爲禪寺。隷妙心。嘗有長松廢寺。遂合爲一。以名其山。

幕末、岡藩の儒者、唐橋世斉の記録、豊後国志、現弥生町、洞明寺の由来である。大同二年（八〇七）創立で元来天台宗の寺、惟治の祈禱寺、慶長の年以降は、禪宗妙心寺派で長松寺を合わせたので、山号を長松山とした、こんな意味だろう。大同二年の開山であるから随分古い。

中世に至って京都の聖護院を本山寺とし、院には熊野三山奉行を勤めた今熊野社があり、修験道では本山派である。洞明寺境内に第一級の梛の木があり、天然記念物

に指定される。自生するものでない事は前にも述べた。熊野社の神木であるから修験者か其の信仰者が植えたものと思える。洞明寺も古くは、密教系修験寺の様である。そう解するのが筋道であろう。

洞明寺の梛の木

宿善寺の梛の木　本匠村井ノ上に宿善寺がある。慶長十七年創立、真宗東派に所属、奇岩巨石が目を引く所に建立されている。近くに平家傳説（大友興廃記）の前高明神社が鎮座する。社前に番匠川の名水を見て、後山に洞穴、岩屋、奇岩を見る。平家傳説を其のまま鵜呑にすることはできない。日本国中至る所に傳説があるからである。宿善寺の梛の木も、佐伯地方では、指折りの一つにかぞえる天然記念物である。

神秘的な地域全帯を考え合わせると答は自から生まれてくる。古来密教の寺院があって、修験の行場と合わせて、信仰者の宿場であった。其の中で貴族落人説を作り上げ、立入り難き場所として民衆に畏敬の念を作り上げた其の様な説が成り立つ。

中世以前の宿善寺も、地域全体から見て考えれば、修験の道場としての色彩が濃厚といえる。梛ノ木、巨石、奇岩、洞穴、岩屋等がそれを物語る。

仏像の様式　仏像の様式、つまり、ほとけの組合せをいう。この様式は中世佐伯を知る上で大切と思うので組合せの一部を次に記し、古い寺院の仏像の様式を見る事にする。

本尊仏	脇侍	本尊仏	脇侍
薬師如来	月光菩薩	阿弥陀如来	観音菩薩
	日光菩薩		勢至菩薩
十二神將			
千手観音	不動明王	不動明王	矜羯羅（コンガラ）童子
	毘沙門天		吒迦（セイタカ）童子

役の行者　前鬼　升賊天　（神使）蛇
後鬼

仏像の形式を一部分のみ記した。古い寺院に当てて見たい。

龍護寺の仏像

秘仏千手観音菩薩、鎌倉時代の作と傳えられる。脇侍には不動明王、毘沙門天（別名多門天）で、熊野三山、那智宮の本地仏と同じくする。秘仏は緑日以外開扉しないが基壇の脇侍、不動明王、毘沙門天は、玉眼、彩色等を見る限り古仏の感じがする。

不動明王　本尊千手観音　毘沙門天

龍護寺

樫野永福庵の仏像

本尊阿弥陀如来、脇侍、観音菩薩、勢至菩薩、この様式は熊野三山の内本宮の本地仏である。阿弥陀如来は西方極楽浄土の仏で其の信仰は平安時代から浄土教と共に盛んになるという。永福庵の如来像が如何にして樫野の里に持込まれたかは今の所不明である。観音勢至の両菩薩も佐伯地方では珍しい仏像と思える。不思議な魅力を持った芸術品で藤原時代―鎌倉期の作だろう。十三重塔とは、密接な関係があることに間違いない。

観音菩薩　本尊阿弥陀如来　勢至菩薩

樫野永福庵

長楽庵の仏像　本匠村井ノ内にある庵寺である。本尊は薬師如来、脇侍に月光菩薩、日光菩薩を従える。此の様式は熊野三山の内新宮の本地仏とされる。十二神将が三尊仏を見守って異様なまでに神秘的。往年の面影はないが藩政の三薬師の一つとある。毘沙門天、不動明王の尊像も実に立派で古仏の感じがする。

右　月光菩薩
本尊　薬師如来
左　日光菩薩

本匠村長楽庵

常楽寺の仏像　本尊千手観音座像、脇侍不動明王、毘沙門天、熊野那智の信仰仏で前述の龍護寺の仏像様式に変わりない。この型は密教の最たる形式である。本尊は秘仏であるので常日は拝顔できない。脇侍の不動明王、毘沙門天は両脇の雑然とした所にあって面向を下げる。彩色玉眼等を見ると自分なりに仏像の素晴らしさを理解できる。文安四年（一四四七）の銘入鰐口があり、現在市文化財として保存されている。境内に應永（一三九四―一四二七）の石造物がある。南北朝以前の創立がわかる。

堅田常楽寺

佐伯荘語る　以上中世佐伯荘を裏から見た信仰、つまり民衆の真剣に生活した基盤には社寺、仏像等精神的信

仰の対象物が必要であって、それ等が重大な役目を果したという其の事である。

前に述べたものは極僅かな一部分のみの佐伯地方の社寺、仏像を小者が見た感想である。一度や二度の足運びでは解明は程遠いが総体に感じる事は密教系の社寺の多いのが目を引く。奥豊後に至っては密教の世界、修験の世界其の様な中世観さえある。隅々を深求すれば新しい中世資料が多く発見できるのではないか。

前鬼　役行者　後鬼

海岸寺　見久津

佐伯湾、蒲江、津久見の各沿岸にも修験の足跡が見える。磨崖仏、石造仏等、修験との関係が今日クローズアップされそうであるのも興味を引く、中世佐伯荘を遡って側面から見れば、熊野権現社や、密教系寺院等と修験との関係。そういう見方も中世佐伯荘を知る上で必要課題とせねばならない。